

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

J T U ボ ラ ン テ ィ ア 福 島 報 告

3. 11 大震災から 5 ヶ月、放射能汚染による復興の遅れが心配な福島県の子どもたちへの教育支援、また被災された地域の方の本音の声を知りたいと思い参加しました。

8 月 17 日（日）正午に到着、福島駅前には心なしか人通りも少ないように感じました。

私たちのタームは 1 泊 2 日での山形県蔵王への自然体験活動の引率と最終日の学習支援でした。自然体験学習への参加者は福島県在住の子どもたちと、避難し山形に在住する子どもたちと保護者合わせて約 50 人でした。初日はあいにくの天候で蔵王の自然を満喫するわけにもいかず、急遽 2 組に分かれ近くの中学校でのプール遊び、ロープウェイを使った蔵王観光となりました。霧立ちこめる蔵王散策では思い切り大声を出し山頂を駆け回る元気な子どもたちの姿が見られました。翌日は天候もやや回復し、山形の名勝史跡、山寺（立石寺）を訪問しました。午後は前の川原でも水遊びも楽しむことができました。



夜の交流会では保護者の方から、これまでの避難生活をふり返ってのお話が聞けました。子どもが被爆してはと、とにかく大急ぎで福島を離れたものの、数ヶ月経った今もなお、生活基盤が成り立たないことや、今後の将来展望が描けないことへのいらだちを話してくださいました。また、原発事故により働く場所も住む場所も一度に失った若い夫婦は、「政府の支援により温泉宿で寝泊まりができ、当然三度の食事もしっかりとある。子どもと一緒にいる時間が増え、それはそれで大変有り難いことだけれど、父親の働く姿を子どもに見せたい思いも叶わず、いつまで避難生活が続くか分からない状況でストレスが溜まるのか、逆に些細なことで夫婦げんかをしたり、言いようのない将来への不安を感じたりとこのままでは『心が腐っていくのではないか』と苦悩しているということです。

「道路や港など目に見える改善はすすんでも、そこで働き、暮らし、生きていくという日常が戻らないかぎり復興には程遠い…学校だけを…家の周辺だけを除染して『生活できますよ』といわれても雇用やそこに暮らす人々の経済の循環がなければ帰れません。」

最後にお父さんはぽつりと言いました。

この子たちが大人になった時、「村」や「町」は帰ることのできる故郷となっているのだろうか…。

目に見えない放射線の影響がすべての人々の幸せを一瞬にして崩壊させた。長い時間とそれに復興への支援、忘れてはならない記憶として私たち自身が持ち続けなければならないと強く感じました。